

学内グラント 報告書

平成21-22年度 学内グラント終了時報告書

地域の社会福祉施設での早期体験実習は医学生意識をどう変えるか

研究代表者 佐藤 真喜子(地域医学・医療センター)

研究分担者 荒木 隆一郎¹⁾, 柴崎 智美¹⁾, 鈴木 洋通¹⁾, 森 茂久²⁾,
有田 和恵²⁾, 鈴木 郁子³⁾, 丸木 和子³⁾

はじめに

埼玉医科大学は障害者・高齢者福祉施設を擁した全国でも数少ない医科大学である。特に重症心身障害児施設光の家療育センターは、重度の知的障害に重度の身体障害を併せ持つ医療的ケアのニーズが高い障害児者が利用し、医師を含んだ専門職種間の連携が実践されている。こういった特徴を活かし、埼玉医科大学では、医学を学習することへの関心を高め、医学生として備えておくべき基本的な臨床技能を修得することを目標に臨床入門実習を行っている。その一環である光の家療育センターでの実習では、1年生、2年生に対して、障害児者とコミュニケーションをとること、患者のケアについて職種間で考え方を共有することを目標に実施している。

1年生で行われる光の家実習では、学生1人が光の家の交流スペースに集まる利用者1名を担当し、カラオケなどをしながらコミュニケーションをとる実習を半日実施している。利用者のコミュニケーションの手段は、言語・文字盤・身体的サインなど様々である。

また2年生では、平成21年度は、新型インフルエンザ対策のため臨地実習に替えて光の家スタッフによって光の家利用者の症例のビデオを提示、症例を踏まえたKJ法、SGDによる少人数演習、および全体での発表・討論を実施した。平成22年度には、各学生の担当する利用者に関する事前配布資料に基づき職員と意見交換、情報収集を行ったあと、コミュニケーションや直接介助を約3時間実施した。

これまで障害児者と医学生、看護学生等との交流を含む早期体験実習の効果が報告されており、障害を持つ人とのことばや身振りによるコミュニケーション

の重要性の認識や、実習によって重症心身障害児への印象がnegativeな印象からpositiveな印象へ変化することが確認されている^{1,2)}。

そこで私たちは、将来医師として、患者中心の医療、チーム医療を実践するために身につけておくべき、人をケアすることや、医師や職種の役割、ノーマライゼーションやコミュニケーションについての意識や理解が、医学部入学早期における障害児者施設での実習により、どのように変化するか、自記式調査票を用いて調査し、障害児施設での実習の効果を検討した。

対象と方法

対象は実習に参加した、平成20年度1年生107名(男子学生61名、女子学生46名)、平成21年度1年生111名(男子学生70名、女子学生41名)、2年生110名(男子学生64名、女子学生46名)、平成22年度1年生124名(男子学生81名、女子学生43名)、2年生114名(男子学生72名、女子学生42名)である。調査項目は、障害者や福祉に関する経験や知識、障害者と接すること、障害のある方の暮らし、光の家について、コミュニケーション等に関する内容で、1年生実習前後、2年生実習後に自記式質問票への回答を依頼した(表1, 2)。

調査票の回収率は、平成20年度1年生実習前95.3%、実習後92.5%、平成21年度1年生実習前98.2%、実習後94.5%、2年生実習後100%、平成22年度1年生実習前97.5%、実習後94.3%、2年生実習後89.4%であった。

今回は、実習前後ともに調査票の回収ができた1年生延べ312人、2年生延べ212人についてまとめ、性別・年度別に集計を行い、1年生実習前後の変化と2年生実習終了後の状況を比較した。

結 果

1年生実習前の調査では、本学入学前の障害児者、

1) 地域医学・医療センター

2) 医学教育センター

3) 毛呂病院 光の家療育センター

福祉に対する経験や意欲についての調査を行った。同年代の障害児と一緒に遊んだり、勉強をしたことがある学生は48.4%，障害をもつ人の介助をしたことがある学生は21.8%，障害児者や老人の福祉施設でボランティアや実習をしたことがある学生は40.3%であった。これらは、3年度ともにいずれも女子学生で高かった(図1)。

障害のある方が施設で暮らすことについては、とても良い・やむを得ない事情があればよいが合わせて95%以上を占めていた。そのうち、とても良いを選択した学生が1年生実習後では男子学生で50.5%から51.8%，女子学生で39.8%から54.5%と増加した。しかし、できることであれば家族と暮らすことが良いと考える学生が大半であった。

表 1. 1年生調査項目

1年生調査項目	調査時期
同年代の障害児と一緒に遊んだり勉強したことがあるか	実習前
障害をもつ方の介助をしたことがあるか	実習前
福祉施設でボランティアや実習をしてみたいと思ったことがあるか	実習前
福祉施設でボランティアや実習を実際にしたことがあるか	実習前
重症心身障害児施設光の家療育センターについて知っていたか	実習前
障害がある方が施設で暮らすことについて	実習前・後
障害者が地域で生活するために改善すべき課題	実習前・後
初対面の人とコミュニケーションをとるときの注意点	実習前・後
障害のある方とコミュニケーションをとるための工夫や配慮	実習前・後
今回の実習で障害児者と接してみて感じたこと	実習後
見学実習の内容や方法について	実習後
また福祉施設でボランティアや実習・仕事をしてみたいと思ったか	実習後
障害児と初めて接する時期	実習後
同年代の職員の方の仕事について感じたこと	実習後
働いている職員について感じたこと	実習後
光の家の医師の役割	実習後

表 2. 2年生調査項目

2年生調査項目 (実習後のみ)
今回の実習で障害児者と接してみて感じたこと (平成22年度のみ)
見学実習の内容・方法について (平成22年度のみ)
2年間にわたる光の家に関する実習でまた施設に来たいと思ったか
障害がある方が施設で暮らすことについて
障害者が地域で生活するために改善すべき課題
光の家で勤務する職員の仕事について
光の家の医師の役割
社会や地域における光の家の役割
将来障害児の医療に関わりたいと思うか

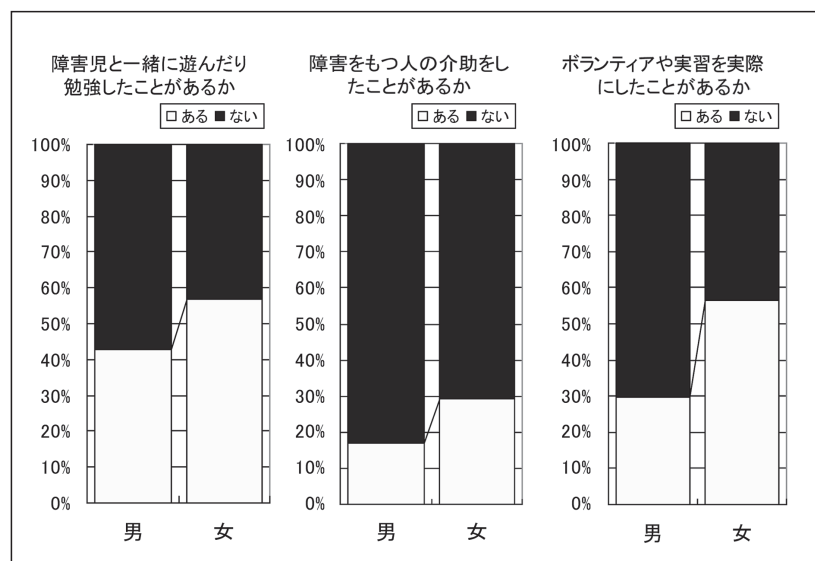


図 1. 本学入学前の障害児者、福祉に対する経験や意欲。

障害者が地域で生活するための課題としては、1年生実習前は健常者の意識が81.1%と最も高く、社会の整備64.4%、障害者のための社会の制度64.1%となったが、1年生実習後、2年生実習後では、ともに健常者の意識に加え施設の援助が増加した。

初対面の人とコミュニケーションをとるときに気をつける点では、実習後で相手の話をよく聞く、相手の表情・しぐさなどをよくみる、笑顔で接するよう気をつける、自分の視線に気をつける、相づちや頷きをする等の言語以外のコミュニケーションの重要性を感じた学生が増加していた(図2)。

障害のある方とのコミュニケーションをとるため

の工夫や配慮では、表情の変化に気づくが87.8%と最も多かったが、仕草や動作の変化に気づく、自分から声をかけるなど、進んで話しかける、発声の特徴に気づく、普段相手を理解している人から情報を得るが増加し、中でも相手に触れてみるが12.8%から52.2%と著増した(図3)。

光の家医師の役割としては平成21年度2年生実習後では患者様とのコミュニケーションが84.5%と最も高く、家族の支援を選択する学生が63.6%であった。直接利用者との触れ合いのあった平成22年度では、治療が80.4%と最も高く、病気の悪化の予防が76.5%、治療方針の決定72.5%であった。

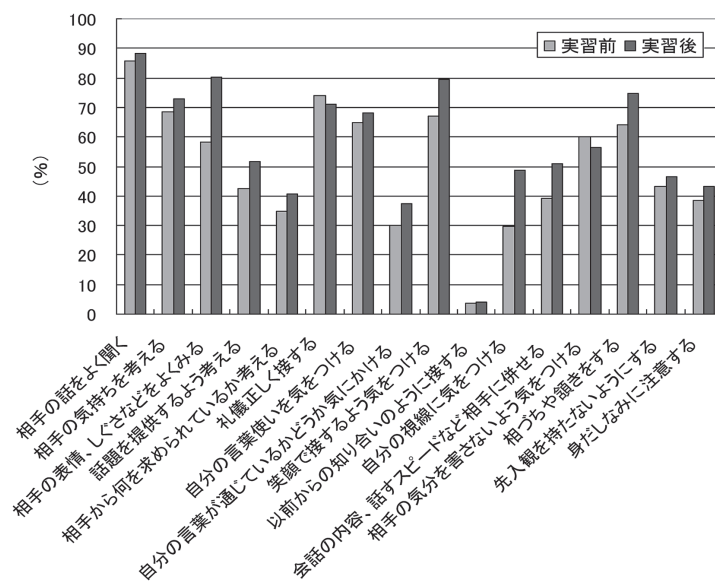


図2. 初対面の人とコミュニケーションをとるときに気をつけている点.

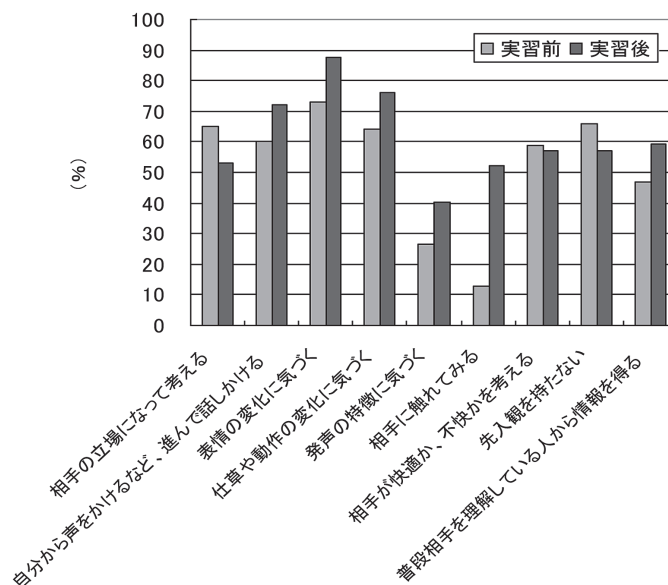


図3. 障害のある方とコミュニケーションをとるための工夫や配慮.

また光の家のような施設でボランティアや実習をしてみたいと思った学生は、1年生実習前後で54.7%から64.4%と増加が認められた。将来、障害児の医療に関わりたいと思う学生は平成21年度2年生実習後では50.0%(男子学生42.1%, 女子学生60.8%), 平成22年度では44.0%(男子学生34.4%, 女子学生58.9%)であった。

考 察

実習前の障害児者との交流の体験は、女子学生で比率が高く、同じ医学生であっても、女子学生の方が障害児者・福祉に対する経験値が高いことが明らかになった。また、2年間の実習後に将来障害児医療に関わりたいと思った学生も、2年生の実習形態が異なった2年度ともに、男子学生より女子学生で高く、障害に対する認識に男女で差があると考えられた。これは、女性が持つ母性に関連しているのかもしれないが、今後更に検討を加えたい。

また、今後も実習やボランティアをしてみたい学生が増加したことは、実際に実習やボランティア活動を行うかは別として、そのような意識を持った医学生が1人でも多く医師になっていくことが障害児者の医療や地域医療を進めていく上では大切なことであるといえる。

障害者が地域で生活するために改善すべき課題として健常者の意識が高かった理由としては、学生の記述にもあるが健常者はどこか障害者の方を敬遠しているところがまだあるといったことや、自らの考えに立ち返って障害者に対する偏見等を持たないようにしたいと思ったことなどが考えられる。実習後に施設の援助が増加した理由としては、光の家利用者の障害の重さと障害者に対する施設の専門家のケアの重要性を認識した結果ではないかと考えられた。

コミュニケーションツールとして実習後に非言語的コミュニケーションの重要性を感じた学生が多く、特に障害児者とのコミュニケーションでは、「気づき」、「積極性」、「情報収集」の重要性があげられ、特にボディタッチまで含めたコミュニケーションに気づいた学生が多かった。これは、医師になるために相手の立場に立って考えるためのコミュニケーションの多様性を体験できる良い機会になったものと考えられた。

以上のことから医学部入学早期における障害児者施設での実習により、障害者に対する意識の変容がみられ、非言語的コミュニケーションの重要性や、福祉施設における医師の治療以外の役割に気づくなど、早期体験実習としての効果が明らかになった。

謝 辞

本研究は平成21年度埼玉医科大学学内グラント(21-3-2-12)の補助を受けて行われた。本研究の遂行に

あたり御協力頂きました光の家療育センターの関係者の方々、またご指導頂いた先生方に深く感謝致します。

文 献

- 1) 浜田淳, 太田節子, 福嶋義光. 医学教育における早期体験実習の意義-主に介護の双方向性をめぐって学教育における早期体験実習の意義. 信州医学雑誌 2003;51(4):225-32.
- 2) 下見千恵. 重症心身障害児に対する看護学生の印象の変化とその関連要因についての考察(第1報). 広島県立保健福祉短期大学紀要 1997;3(1):31-8.

研究成果リスト

学会発表

- 1) 佐藤真喜子, 柴崎智美, 荒木隆一郎, 鈴木洋通, 大野洋一, 宮崎孝, 羽生真由子, 山崎芳仁, 吉田喜太郎, 菅野義彦, 有田和恵, 森茂久, 別所正美. 医学部学生を対象とした重症心身障害児施設での臨床入門実習の評価, 第41回日本医学教育学会大会, 平成21年7月, 大阪
- 2) 佐藤真喜子, 柴崎智美, 荒木隆一郎, 羽生真由子, 宮崎孝, 大野洋一, 鈴木洋通. 重症心身障害児施設における臨地実習前後の意識変容調査-調査紙法による分析, 第68回日本公衆衛生学会総会, 平成21年10月, 奈良
- 3) 荒木隆一郎, 佐藤真喜子, 柴崎智美, 羽生真由子, 宮崎孝, 大野洋一, 鈴木洋通. 重症心身障害児施設における臨地実習後の意識調査-text miningによる分析, 第68回日本公衆衛生学会総会, 平成21年10月, 奈良
- 4) 佐藤真喜子, 柴崎智美, 荒木隆一郎, 鈴木洋通, 大野洋一, 宮崎孝, 羽生真由子, 山崎芳仁, 吉田喜太郎, 菅野義彦, 有田和恵, 渡辺修一, 持田智, 森茂久, 別所正美. 医学部学生を対象とした重症心身障害児施設での臨床入門実習の評価第2報, 第42回日本医学教育学会大会, 平成22年7月, 東京
- 5) 荒木隆一郎, 佐藤真喜子, 柴崎智美, 鈴木洋通, 山崎芳仁, 吉田喜太郎, 有田和恵, 森茂久, 渡辺修一, 間嶋満, 持田智, 別所正美, 鈴木郁子, 丸木和子. 重症心身障害児施設における医学部1年臨床入門(ICM)実習の振り返りレポート計量テキスト分析による評価, 第42回日本医学教育学会大会, 平成22年7月, 東京
- 6) 佐藤真喜子, 柴崎智美, 荒木隆一郎, 羽生真由子, 宮崎孝, 大野洋一, 鈴木洋通. 重症心身障害児施設における臨地実習前後の意識変容調査-調査紙法による分析, 第69回日本公衆衛生学会総会, 平成22年10月, 東京